夜半の声

椎名　ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜半の声

【Ｎコード】
Ｎ８４８６Ｆ

【作者名】
椎名　ルイ

【あらすじ】
『ＳＩＤ』それは国に見捨てられた貧困の町。そこでは人々の欲望がさらけ出され、今日を生きるのも困難な住民だけが存在していた。その中で出会うべくして出会った３人の行方は――……？

プロローグ

蓮妃（れんひ）……どこにいる？　ずっと探し求めたモノ。一度は捨てたもの。白髪交じりの初老の男が掠れた声で呟いた。

どこにいる、蓮妃！　どこまでも探し続けよう。たとえこの身をが滅ぼうとしようと。愛しい蓮妃。途端、画面が輝きだした。ある地図の一部が赤く点滅している。

見つけた……！

歓喜の声。男は身を乗り出すようにしてディスプレイを覗き込む。場所はわかった。次は、この場に招待を。とっておきの歓迎のシナリオを。もう逃がさない。もう離さない。愛しい蓮妃。

次に会ったときには、永久を誓った杯を――

第一章：やがて幕は開く【Ⅰ】

２０３０年１月。
南に位置する街、「ＳＩＤ（シッド）」。いつからその名がついたのかは明白ではない。ＳＩＤは政府に見捨てられた街として長い間、存在してきた。辺りは絶え間ない罵声と争いの音が満ちており、それが途切れることはない。
そんな街の一角に少年、鈴音（りんね）が静かに佇んでいた。
着古したような大きめのＴシャツ、薄手のジャケットにジーパン。その姿は真冬の格好には少し寒いだろう。しかし、鈴音はそれを気にせずポケットに両手を入れ、睨むように深い黒色の瞳を朝日に向けている。

「鈴音……何を考えている？」

背後で低い男の声が聞こえた。秋也（しゅうや）だ。ＳＩＤに来てからずっと一緒にいる。鈴音が雇った人材だった。秋也の住居と食事を保証する代わりに、秋也には鈴音の仕事を手伝わせている。背が大きく、無駄な肉など一切付いていない細身の体型。それからは想像できないような筋肉が服の下には隠されている。

「別に。今日の仕事は大変そうだな、って考えていただけだ」
「ああ、依頼来てたんだっけ？　おれは何か手伝うことあんの？」

鈴音は黙ってポケットから紙切れを２枚だした。それを秋也にひ

らひらと見せる。

「今日の依頼。外野の社長夫人からと、ここの外れにあるパン屋から」

外野とはＳＩＤから電車で２時間の場所にある、高級住宅街のことだ。他に正式な名前があったが、思い出す必要はないだろう。

「ふうん。どっち行く？　おれはどっちでもいい」

秋也が面倒くさそうに言う。それを聞くと鈴音はパン屋の依頼が書かれた紙を２つに折って、秋也に渡した。

「外野のほうに行く。こっちの方が楽しめそうだ。パン屋は家の取り壊しの依頼。主人の目を盗めたら、何か盗ってきても構わない」

「了解」

短く返答がして、秋也の気配は遠のいた。ＡＭ５：００。依頼人との待ち合わせは７時半だ。今から電車に乗ったとして、十分に時間はある。

鈴音はその場から身を翻し、やや早足で駅へと歩を進めた。

＊＊＊＊＊

そもそも、鈴音たちがやっている仕事とは何なのか。簡単に言えば、「何でも屋」である。金さえ払ってもらえば、どこの住民だろうとどんな内容だろうと老若男女問わず引き受ける。

例えば、さっきの家の取り壊し。あんなのは意外と楽な作業に入るだろう。鈴音が記憶する中での最悪の依頼は、「銃の練習相手」。要するに、的になれ、と言う依頼だった。鈴音が依頼人を殴り倒したのは言うまでもない。

今回、鈴音が受けた依頼は「娘の命を狙っているやつを捕まえてほしい」。この依頼を聞くなり、金持ちも大変なのだと軽く嘲笑したものだ。家の取り壊しなんかよりずっといい。スリルがあった方が仕事としてはやりがいがある。

人気のない電車を最寄駅で降りて、徒歩15分ほどのところに依頼人の家は堂々と建っていた。

ドアに付いていたインターホンを鳴らす。思いの外(ほか)大きい家だ。鈴音からしてみれば土地と金の無駄遣いにしか見えないが。玄関前、監視カメラなし。警備もなし。一応、大手玩具メーカーの社長自宅なのだが、不用心も甚だしい。もう少し自覚を持ってほしいものだ。家に金をかけるより警備や監視カメラをつけた方が、娘が命を狙われるなんて可能性はぐっと減る。

メイドらしき人が応対し、用件を言うとすぐに大きい門が重たそうな音をたてて開いた。

「依頼人の新庄です。噂は聞いておりますわ」

入るなり待ち受けていた、新庄が勝手にしゃべりだした。

「鈴音です。それはありがとうございます」

「ええ、とっても耳障りな噂を。ＳＩＤの住民なだけあってとても粗雑で、薄汚れていると」

いつものことだ。そんなことを鈴音に言ってどうしようというのか。肉弾戦ではもちろん、口論でも外野に勝つ自信はある。

「そんな薄汚い住民に何を期待してこんな依頼をされたと？報道の方にばれては不味いからではないのですか？」

口の端を釣り上げて、馬鹿にしたように笑う。新庄の眉間に皺がぐっと寄った。

分かり易いな。

心の中で低く呟く。新庄はこれ以上詮索されるのを嫌ってか、いきなり身を返すように話題を変えた。

「……報酬は大層な額だと伺っておりますが」

そうでしょうか、息を吸い込んで答えた鈴音の鼻にきつい香水の匂いが届いた。不快な匂い。

「実際は、幾らほどの報酬をお望みなんですの？」
「そうですね、金貨７枚ほどではいかがですか？」
「なっ……！」

鈴音の出した金額に動揺したらしい新庄が顔色を変える。鈴音はその様を例の黒色の瞳でじっと観察していた。
――応じるか、応じまいか。
選択肢は二つだけである。妥協は許さない。応じなければ、こんな仕事は放っておくだけのこと。

「それでは、応じない、とのことでよろしいですか？」

新庄の言葉に重ねるように問掛ける。その肩がビクッと揺れた。金持ちたちが忌み嫌うＳＩＤにわざわざ仕事を頼むほどの事だ。簡単に「そんなには払えません、さようなら」で片付く内容ではないはず。
さあ、どうする？金持ちさんよ。

「……分かりましたわ。お支払いいたします。他に条件はございますの？　この際です。何でも受け入れてしまいましょう」

賢明な判断だ。新庄もただぬくぬくと育ってきたわけではないらしい。社長夫人としての潔い決断力がある。

「ありがとうございます。それでは、他に缶詰や洋服をお願いします。……依頼内容を詳しく教えてください」
「娘の護衛ですわ。手紙でも言いましたように、ここ1週間娘を狙う輩がおりまして。捕獲してほしいのです」

なるほど、鈴音はそう相槌を打った。……とするとライバル業者の仕業の確立のほうが高いな。これは早く決着がつきそうだ。
相手が初心者であれば、よほど手を抜かなければ素手でも捕まえられる。その自信と技量が鈴音はあった。

「わかりました。報酬は後ほどいただきます。こっちで動くので無駄な干渉はしないでください」

釘をさす。ど素人が鈴音の仕事に口出しをされると動きにくくなるのだ。かくして、鈴音は犯人を捕獲するべく動きだした。

【Ｉ Ｉ】（前書き）

多少、残酷な描写がございます。

【Ｉ】

日が沈みかけたころ、鈴音はＳＩＤの街中を歩いていた。
仕事は支障なく進み、昼すぎには犯人を確保。結局は鈴音の読み通り、ライバル社の平社員だったのだ。
今抱えている段ボールには新庄から報酬として受け取った、衣類と日持ちをする食糧。それに加えて、鈴音が山積みにされていた中からばれないように掠め取った毛布が３枚ある。腰には鈴のついた革袋に金貨が７枚と銀貨が５枚入っていた。金貨７枚は新庄からの報酬。銀貨５枚は犯人を捕獲した際にかすめ取ったものだった。
煩い喧騒の中を１人で歩いていると、正面から思い切り人がぶつかってきた。尻もちをつくまでには至らなかったものの、少しよろけてぶつかってきた者をじろりと睨む。
そこで鈴音は音をたてて固まった。

「凛々亜（りりあ）！」

ぶつかってきたその少女は鈴音が知っている者の顔と酷似していたのだ。動揺しながら、尻もちをついていた少女を引っ張り起こす。

「へ、あ、凛々亜って……？」

少女の驚いた顔を見て、火照っていた鈴音の脳が冷静に作動した。
……別人だ。
顔はそっくりだが、瞳の色が違う。凛々亜の瞳はブルーグレーだ

った。けれど、この少女の色は褐色。それ以外は本当に実物のようだが……。

「……悪い、人違いだ」

俯き加減で素直に謝ると、その少女は慌てたように手を顔の前で振った。

「いえっ、平気です！　あ、ついでと言っては失礼ですけど道教えてくれませんか？」

にゅっ、と地図を差し出して笑う少女に鈴音は少々面食らいながら、ちらりと目を落とした。途端、疑念が頭を掠める。この地図が示している場所ってもしかして。

「おれの家に何か用か？」
「へ？　ああ、そうなんですね！　丁度よかったです。そこに私の叔父が住んでいて、今日からお世話になります」
「お世話？　おれには関係ない。それにお前の叔父はもう半年以上前から行方不明。よって、おれにあんたの世話をする義理はない」

淡々と述べた事実に少女は茫然して固まった。鈴音はちらりと視線をくれただけで、声をかけようとはしない。両腕に抱えた段ボールを抱えなおしてゆっくりとその場を去った。

＊＊＊＊＊

黙って扉を開ける。
丈夫に作られた木の家が鈴音の家だった。秋也は先に帰っていたのか、部屋の中は暖かく、いい匂いが漂っている。

「思ったより遅かったな。どこかで油売ってたか？」
「……いや、変なやつに会って時間くった」
「ふうん」

さしも興味なさそうに適当に頷いた秋也は炒飯の乗った皿を持って奥のキッチンから出てくる。米の焼けた香ばしい香りが二人の食欲を誘った。
食べながら、今日の仕事の成果をお互いに言い合う。

「パン屋、どうだった？」
「大したことねえよ。報酬もたった銀貨5枚ぽっち。まあ、パンと小麦粉はいっぱいもらえたけどな。重労働だった割に合わないぜ」

ふん、と不機嫌そうに鼻を鳴らす。その様子を見て鈴音がくすり

と笑った。

「そう怒るな。ここの住民にしては結構な儲けだろう？」
「そうだな。そっちは？久し振りの外野はどうだった？」
「金貨7枚と、毛布3枚、あとは、服と缶詰。捕獲した犯人から銀貨5枚も盗ってきた」

それに、と鈴音は続ける。

「変わったな、外野は。閑散としている。前の煩さはどこに消えたんだか。不景気が呼んだ静けさってやつかな」
「けっ、あそこは静かなくらいでちょうどいいんだよ。仕事の上客じゃなかったらあんなところおれが滅ぼしてやるね」
「昔からそうだな、秋也は。全然変わってない」
「ほっとけ。性格だ」

食器を片付けて、本棚から本を抜き出したとき、ドアがいきなり強く鳴った。誰かがドアを叩いている。
誰だ？こんな夜中にこの家に訪ねてくる人の見当が全くつかない。

「助けて！」

鈴音が反応した。忘れるわけがない。夕方にぶつかってきたあの少女だ。凛々亜に瓜二つの少女。助けて、だと？

「おい、お前の客か？」
「まあな。屋根から少し状況見てくる」

ため息をひとつ付きながら屋根へと続く梯子をのぼった。外は暗い。鈴音の口からは真っ白な吐息が。梯子を上った先には凍てつくような風と闇。いくらＳＩＤが南に位置している街でもこの時期にはこれくらいは冷え込むのだ。
身を１回震わせて、鈴音は屋根から見下ろした。ドア付近には夕方の少女、その後ろにいるのは……なんだ？
全身が真っ黒だ。闇に紛れてその顔は見えない。いや、青い瞳だ。光を放っているかのようにそこだけが黒に映えている。深い青。飲み込まれてしまいそうだ。
少女が恐れているのはこいつのことか。
そっと腰にさしていた小型銃を抜く。片手にはサバイバルナイフを。
目標に向かって銃を撃った。乾いた銃声が響く。少女の背中がびくっと揺れた。弾は鈴音が狙った右腕に見事に命中する。

「なっ……！」

鈴音は驚愕の表情を浮かべた。右腕には放った弾が貫通しているはずだった。本来ならば、血が吹き出し、相手はどんなに屈曲な者でも退くはずだった。しかし、弾丸は食い込んだまま威力をなくしたかのようにその場に留まる。
こいつはなんだ？　人間じゃない。人間ができることではない。

闇が突如切り開かれた。
鈍く光沢を帯びた長い槍のようなものが鈴音の右肩を貫く。深く肩に食い込んだそれを引っ張られて体が傾いだ。
世界が反転する。　いや、反転したのは鈴音自身。闇の中へ落ちていく。真っ逆さまに。
いまさらながらに右肩から吹き出るような痛みを感じた。

「っ……！」

屋根から叩き落とされた。息が詰まる。その上から肩口の激痛が波打つ。
胸を激しく上下させながら目を開けた。見下ろしていた青い瞳が自分を見据えている。その背後には少女の姿。
あいつはここにいてはだめだ。
掠れた声を振り絞るようにして出す。

「中にいろ！　邪魔だ！　秋也！」

青い瞳が鈴音の言葉に反応して今度は少女を捉える。
少女に向かって手を伸ばす。

「早く！」

鈴音が再び叫ぶ。秋也の腕がドアから伸びて恐怖で体が硬直して

いる少女を部屋の中に引きずり込んだ。
次の獲物を見失った青い瞳は伸ばしかけていた腕を鈴音にかざす。
目を見張った。
そのかざされた手。長く、黒い指が5本揃っている。その指から自分の肩口を刺した物と同じ光沢があった。
未だに右肩に突き刺さったままの槍を右目で辿る。
それは確かに指から出ていた。自分の指を二倍にしたような太い指が伸びて、右肩に達している。
今、自分にかざされている指もそうであった。
伸びている。

「ぐっ」

追い打ちをかけるようにもう一本の指が伸びて、右肩を抉った。
息をつめ、自分が相手にしている人間離れしたものを凝視する。

「くっそ……！」

苦痛の中で呻いた。苦し紛れに左手に握られていたナイフを掲げ、刺さっている指に突き立て、思い切り押し込んだ。
ぶちっ、と肉の切れる不快な音が聞こえる。
青い瞳は半歩後ずさる。その隙を逃さずに鈴音は後ろに回り、後頭部に鋭い蹴りを食い込ませる。

「秋也！」

屋根から秋也の放った銃が眉間に1発当たり、立て続けに胴、脚を容赦なく狙う。

ぎゅう、と青い瞳が唸った。

指がなくなった手で顔を覆い、闇へと逃げていく。何発もの銃弾が当たったにも関わらず俊足だった――……

【ＩＩＩ】（前書き）

少し血などの表現がございます

【III】

青い瞳が闇に紛れたのを確認すると、鈴音は身体を引きずるようにして家の中に引き返した。

「しくじったか」

秋也のテノールの声が迎える。それに対して鈴音は薄く笑っただけで何も答えない。

「……刺さってるやつ、抜いてほしいんだけど。結構、痛い」

「結構じゃねえだろ。ったく、ここに寝ろ。手荒くするぞ」

示されたベッドに仰向けに寝転がる。パサっと布が落ちる音がしたのは秋也がタオルを取り出したからだろうか。

「いくぞ」

掛け声とともに今日で何度目かの激痛が体内を駆け回る。喉の奥で殺しきれない呻き声が絡まった。

「女！　タオルとれ、タオル！」

抜いた途端に真っ赤な血液が肩口からあふれ出すのを感じた。それを前もって用意しておいたタオルで秋也がきつく止血する。

「えっ」

「1枚じゃ足りねえんだよ！早く！」

ばたばたと足音が聞こえて少女が慌ててタオルを取り出すのが横目で見えた。

――本当によく似ている――

艶のある栗色の髪の毛も、小さい華奢な身体も。しかし、今は感傷に浸っている場合ではないのだ。それは十分すぎるほど理解していた。

目の霞むような痛みの中で感傷に浸るなんてどうかしている。自分らしくない。

「痛（つう）っ！」

いきなり降って来た熱い痛みに身をよじった。

「秋也……お前、麻酔は？　消毒液の原液そのままかけやがって」
「しょうがねえだろ。麻酔は今切らしてんだ。それより…この傷何かおかしい。毒でも塗ってあったのか？　血が止まる気配がまったくしねえ」
「ふん。毒が、ね。ずいぶんと用意周到で」

さっきから少し寒いと感じていたのはそのせいか。ショック状態を引き起こす前に止血できなければ失血死になりかねない。
こんなところで死ぬなんてごめんだ。

「止血剤は？」
「待て、今探してる。女！　早くしろ！」

叱咤の声が響く。少女がか細い声ではい、と答えた。

「口開けろ」

水と一緒に粒の止血剤が流れ込む。それを静かに飲み下して、力をこめていた手をシーツから離した。脂汗で前髪が額に張り付いて邪魔くさい。
止血していた少女の手を振り払って慎重に起き上がる。痛みに顔をしかめながらベッドに寄りかかり、吐息を洩らした。
貧血か。軽く眩暈がする。傷もだいぶ痛むし、今日は寝付けないかもしれない。

止血剤が功を成したのか、タオルを真っ赤に染めていた出血は収まりつつあった。貫通しているから縫っておいた方がいいのだろうが。

「今は針と糸もないから今日はそのままで寝ろ。明日には縫い合わせてやる」

傷口にガーゼを当て、少し黄ばんで古くなった包帯を几帳面に巻きながら秋也がぼそっと言う。そして秋也から目をはずし、ちらりと横に突っ立っている少女に目を向けた。

そう、問題はこいつだ。

だれだ？

「名前は？」

少女に問いかける。彼女は瞳を潤ませていた。泣きだすのかと思ったが期待が外れる。

少女はＳＩＤ以外の裕福な場所で育ってきた。それが引っ越し早々あんな目に遭ったのだ。

当然泣きだすものかと思っていた。

「汐里……」

ぱらりとテーブルに置いていた本が捲れる音がして冷たい風が吹

き込んだ。

「秋也、外に出るならドアを閉めろ。寒い」
「はいはい」

少しばかり不機嫌な声で返事をしてドアが閉まる。

「汐里って言ったか。お前、これからどうする？」
「え？」
「おれはお前を助けた。けど、ここはおれの家だ。はっきり言うようで悪いが、ここにお前の居場所はない」
「そ、それは」
「事実だろう？　あてにしていた叔父も行方不明だ」
「じゃあっ、改めてここに居候させてもらえませんか？」

それまで床を睨んでいた瞳をあげ、恐る恐るといった体で鈴音を見た。
どうする？
自分自身に問いかける。汐里が足枷になるのは目に見えているのだ。

「無理だ。今回みたいにまたトラブルを持ちこまれちゃ困る」
「何でもします！　だから……」

何でも、か。危険な言葉だな。それに、汐里とは関わらないほうがいい。
これは何の根拠もない、ただの直感だが。

「へえ。じゃあ、1日金貨1枚」
「えっ」
「宿泊料だ。おれも3人養えるほど裕福じゃないもんで」

汐里の顔が歪む。
肩にかけていたショルダーバッグを漁り、小さい財布を取り出した。それを鈴音の前に突き出す。

「この中に金貨が多分、6枚入ってます。私の全財産です。これで私を6日間泊めてください」

それを受け取りながら鈴音は溜息をつく。
厄介なことになってしまった。

【Ⅳ】

「秋也」

ドアの外にいる秋也を呼ぶ。窓に映っていた影が動いた。彼も今の話を聞いていたはずだ。きっと、機嫌が悪いだろうな。
ふと頭の隅でそう思う。

秋也が入ってくるのを待ちながら、鈴音はベッドの傍らに置いてあった段ボールに手を伸ばし、中からセーターを取り出した。今来ている服は最早衣服の役目を果たしていない。治療のために肩の部分は破られているし、自分の血がべっとりと付いてしまっている。
まだ上手く動かない腕に悪戦苦闘しながらTシャツを脱ぐと、そばに突っ立っていた汐里が息をのむ気配が伝わった。
やがて、震える声で言う。

「女の子、だったんですか……？」
「別に隠してたわけじゃないんだけど」
「だって、本当に男の子みたいに振舞ってたじゃないですか！」
「そんなの、あんたには関係ない」

着替え終わると、ベッドから起き上がり、身体を引きずるようにして外に出る。鎮痛剤を先ほど打ったとはいえ、体はまだ貧血気味なのだろう。
ドア付近で何をするでもなく突っ立っていた秋也の耳元に低い声で囁いた。

「汐里にはあまり関わるな」
「だったら何で受け入れた？　言い訳なんぞいくらでもあるだろ」

やはり機嫌が悪い。
いつもなら鈴音の言うことには黙ってきたはずだというのに今日に限って反論を返す。

「おれにはおれの考えがある。詮索は無用なはずだろう？機会があったら話すさ」

ちっ、と聞こえた舌打ち。
今日、秋也の舌打ちを聞いたのは2回目か。

＊＊＊＊＊

「とりあえず今日はもう寝ろ。汐里の事情はまた明日だ。寝る場所は、そこのベッドソファー。段ボールの中にある毛布も適当に使っていい」

そう言って鈴音はさっさとベッドに潜り込んでしまった。汐里も毛布を取り出して潜り込む。
毛布を頭までかぶって瞳をきつく閉じて、そのまま思想へ没頭する。

鈴音……少年のふりをした少女。なぜ、その必要があるのだろう。女ならそのままでいいだろうに。
貧困の街と呼ばれるＳＩＤならではの理由でもあるのだろうか。
正直、怖い。自分は何も知らないのだ。この街の掟、常識、生活のリズム。
おそらく自分が今まで生活してきたものとは大分違うと思う。
すれ違った人々は皆、冬だというのにコートを着ていない人ばかりだった。やせ細った餓死者もいた。当たり前のように道に転がっている死体。それらから放たれている腐臭と出店から漂う香ばしい香りのコントラスト。道の片隅で食糧を乞うホームレス。
汐里は毛布の中で頭を抱えた。
瞳に白目を剥いた餓死者が。
耳にホームレスたちの叫びが。
鼻に吐き気のするような腐臭が。
こびりついて振り払えない。

「どうした？」

ふわりと毛布を被った頭に手が乗った。驚き、顔を毛布の中から出す。そこには、鈴音がいた。暗闇で表情はわからない。
けれど、掛けられた声には優しさがほんのわずかに滲み出ていて。

「り、んねさん……？」
「怖いのか？」

鈴音が低く問う。その声になぜか安堵してようやく一筋の涙が頬を伝った。伸ばされた冷たい手にすがり付いてすすり泣く。

「怖かったときは泣けばいい。遠慮なく泣け。泣いた分だけ、怖さが減る。泣き疲れたら眠るといい」

鈴音の声は子守唄のようだ。
さっきまで全くなかった眠気がごく自然に引き出されてきた。
緩やかに、緩やかに、眠りに落ちてゆく……

＊＊＊＊＊

静かな寝息が聞こえてきた。
鈴音はそっとそばを離れる。

「何らしくないことやってんだよ」
「まだ起きていたのか」

秋也の言葉を無視して違う質問を投げかけた。

「まあな。お前のことも少し気になったし。……さっきのはなんだ」
「随分とご機嫌が斜めじゃないか。ヤキモチか？」
「うるせえ。はぐらかすな」

威嚇する低い声に鈴音は怯むことなく溜息をついた。厄介なやつに見られたな。
秋也は鈴音の感情の動きに敏感すぎる。

「おれが誰に愛着を持とうと勝手だ。おれが心配か？」

わざと言葉の端々に揶揄を含ませる。

「ああ、心配だね。鈴音はおれにあいつには深く関わるな、って言った。あれは鈴音、お前に対しても言えるんじゃねえか？」
「言えないな。おれは秋也と違って感情任せに暴走したりしない」
「ふん。随分とおれも格下に見られたものだな。おれだって感情をコントロールするくらいの脳みそは持ち合わせてるんだぜ」
「その御自慢の脳みそでも、汐里と秋也は相性が悪いと忠告してい

るのが分からないか？」
「はっ、分からないね。まだ会って一日も経ってねえだろ。何でお前にそんなことがわかる？」

まるで腹の探り合いだ。秋也がここまで鈴音を追及したのは初めてのこと。
何をそこまで言うのか。

「わかった。降参だ。これ以上無駄な口論をしても仕方ない。率直に聞く。秋也、お前、何が言いたい？　おれにどうしてほしいんだ？」

両手を挙げて降参のポーズをとりながら鈴音は瞳を光らせた。

「ふん。無駄な口論か。おれは言いたいことはない。ただ聞きたいことがあるだけだぜ」
「聞きたいこと？」
「鈴音、お前はそこの女と誰を重ねてるんだ？」

重ねて。
顔はそっくりだ。声も艶やかな栗色の髪の毛も。確かに重ねているのかも知れない。凛々亜の面影を汐里という全くの別人に。

「別に重ねてなんかいないさ。　そもそも重ねる相手がいない」

「嘘も対外にしろ。そしたらさっきの行動はなんなんだよ。おれは鈴音のあんな声、初めて聞いたぜ」
「気のせいだ。傷が疼くと声も上ずる」
「苦しい言い訳だ」

の言葉を最後に両方とも口を閉ざし、闇の中に沈黙がおりた。どのくらいそうしていただろう。
時計の針はすでに１２を超えていた。先に目をそらしたのは鈴音。

「……もう寝ろ。おれも疲れた。早く寝たい」

突っ立ったままの秋也の脇をするりと通り抜け、ベッドに潜り込む。

「鈴音！」

秋也が引き留めるが、無駄だったようだ。
眠りに落ちてはいないものの、もう言葉を交わす気はないらしい。
苛立った感情をぶつける当てもなく、秋也は自分の髪の毛を掻きまわした。
それぞれの想いをのせて夜は更けてゆく。

【V】

「さて、昨日のことを聞かせてもらおうか」

尋問のような口ぶりに汐里は身を固くした。
否、尋問に近いものがあるかもしれない。
汐里は今、鈴音の家のテーブルで二人とむきあうような形で座っていた。

「お前は明らかに怪しすぎんの」

秋也が皮肉をたっぷりと含めた口調で言う。秋也のその態度に鈴音は軽く頷く。

「それに、営業妨害でもあるな。この体じゃ仕事にも行けやしない」
「え、仕事って何してるんですか？」
「知りたいのか？」

聞き返された。
汐里は瞳を大きく開いてわずかに身を乗り出した。気になる。この少女がどんな生活をおくっているのか。

「はい。知りたいです」

「……秘密」

話をはぐらかされた気がしたが、鈴音は見向きもせずに話を進める。

「それはそうと、何でおれに助けを求めた？」

一番の疑問はそれだということに汐里は気づいた。。
なぜ見ず知らずの鈴音に助けを求めたか。見放されてしまう可能性も十分にある。しかし、汐里には鈴音以外に頼れる人物がいなかった。あのまま、殺されてしまうのがいやだった。必死で逃げてきて居たらいつの間にか鈴音の家の前に来ていたのだ。あの化け物は汐里がその扉をノックするのを待ちわびているかのように、襲い掛かってはこなかった。

「まるで、誘導されているみたいだったんです。鈴音さんの家に」
「誘導？」
「はい。私は足が遅くてとろいから、あの化け物にいつ追いつかれてもおかしくなかったんです。けれどそうされなかった。明らかに手を抜かれていたような気がして。私に手を出してきたのも鈴音さんが家から出てきてからです」

鈴音は視線を汐里から外し、じっと考え込んでいるようだ。ギイギイと古びたイスが軋む音が部屋に響く。
窓の外は風が強く、窓はガタガタとうるさく騒いでいる。この雲

行きから見て、午後には雨が降りそうだ。

がたん

鈴音がおもむろにイスから立ち上がった。薄手の上着をつかんでドアに手をかける。

「質問は一旦お開きだ。おれは少し野暮用で出かける。帰りに何か食いもんを買ってくるからそれまでは家のものは勝手に食べるなよ」

振り向きざまにちらりと秋也に意味ありげな目配せをして、静かにドアは閉まった。

二人だけの室内にチリ、と小さな緊張が走る。

汐里は遠慮気味に秋也を見て、小さく喉を鳴らした。そして俯き思想にふける。

この少年が自分のことをよく思ってないのは明らかだった。朝も汐里のことで些細な喧嘩をしていた。

扉に遮られて中身はよく聞き取れなかったが、自分の名前と苛立ちを含んだ秋也の声だけは聞こえていた。

悪いことをしてしまっただろうか……。

しかし、もう宿泊代も払ってしまったのだ。この家を出て行きたくはない。

自分の全財産、金貨6枚はすでに宿泊代金として鈴音が持っている。

6日間の間に仕事と住居を見つけなければ。

しばらくお互いが無言の時を過ごしたが、先に口を開いたのは汐里だった。

沈黙に耐えられなくなったのだろう。

「り、鈴音さん大丈夫でしょうか？怪我をしたまま外出しましたけど」

気のせいだろうか。
汐里が話しかけた途端に視えそうなほどの不機嫌オーラが立ち上ったような気がした。
話しかけたと言うのに顔も汐里に向けようとはしない。

「シャワー浴びてくる。せいぜい大人しく待ってることだな」

返事を返す間もないまま、秋也は奥にあるシャワー室にドカドカと足を鳴らして消えていってしまった。
1人になってしまった汐里はまだ整理ができない気持ちの置き場所をなくして、当たりを見渡す。
キッチンも今いる部屋も読みかけの本やら食べ終りの食器やら段ボールがだらしなく散らかっている。
心持ち几帳面な汐里はこれを何とか片付けようと動きだした。

＊＊＊＊＊

くそ、調子が狂う。
あの汐里と名乗った少女が無償に腹立たしい。
乱暴にシャワーのノズルを回し、熱い湯を頭からかぶりながら秋也は
完全に己を見失ってしまっていた。
ＳＩＤなんかで助けを求め、鈴音に傷を負わせたことも苛立ちの原因の一つ。
しかし、一番は汐里に対する鈴音の接し方だ。
秋也がいる時こそ、冷たく突き放すような言動をしていたものの、夜中での怯えていた汐里を慰めるような態度が気になった。
自分が記憶する限り、鈴音が他人相手にあんなに優しげな声を出すのを聞いたのは初めてのことだ。
あの少女のどこに鈴音は惹かれているのだろう。
本来は何事にも執着を持たない鈴音に一晩……いや、数時間であれほどに興味を持たせたあの少女は何者だ？
屈託のないただの世間知らず。
自分の目ではそうとしか感じ取れなかった。

わからない。
やつの考えが。

秋也は収まらない苛立ちに頭を悩ませるばかりであった。

【ＶＩ】

鈴音は扉を閉めた後、ドアの横に付いているモニターに視線を流した。
しゃがみ込み、暗証番号を入力して１センチほどのメモリカードを取り出す。
それをジーパンのポケットにねじ込んで、次の目的地へと向かった。

「おう、台は空いてるぜ」
「ああ」

鈴音が来たのはＳＩＤには数少ない電化製品を取り扱っている店だった。
最新の最薄ＰＣ、中古の電話機など割と品揃えが豊富である。
鈴音はそれらを無視してさらに奥へと足を進めた。
最新式のノートパソコンが数台、テーブルの上に置かれている。カラー印刷機付きだ。用があるのはこれ。
４０分使用で銀貨５枚。ぼったくり極まりないが、しょうがない。その分の金は用意してある。

パソコンを立ち上げ、メモリカードを差し込む。
昨夜の映像が見事に残っている。
滅多に使わない監視カメラのスイッチを昨日に限って入れといたのは正解だった。
暗視機能付きだから、暗闇なんてお手の物。
ちなみにこれを作ったのは電気屋の社長……と言うべきだろうか。

早瀬とゆいなだ。　この二人はこのようなものを作り出す腕だけは突出している。
余談だが、これもＳＩＤでは珍しく、この二人は仲の良い新婚夫婦だった。

しかし、暗闇を取り払ったとしてもあの青い瞳は黒に身を包んでいた。顔もよく見えず、性別さえも判断し難い。
それ以前にこれは本当に生身の人間なのかも怪しいのだ。
アップした映像を静止画に加工してプリンターにまわす。
角度を変えて何枚か印刷し、夫婦に金を払って電気屋を後にした。

「何も手がかりなし……か。期待が外れたな」

無感動にそう呟いて、夕飯でも買っていこうと商店街の方へ足を進めた。

＊＊＊＊＊

秋也がシャワー室から出てくると、汐里が部屋の中をせわしなく歩きまわりながら片付けをしていた。
それは秋也の自室にも手が及んでおり、思わず頭に血が上る。

「勝手なことしてんじゃねえよ」

威嚇の声を発して汐里に近づいた。汐里は驚きと僅かな恐怖で両手に持っていた本を取り落とす。

びくびくとしたその姿はか弱い小動物のようだ。

ちっ、と舌打ちをして本の埃を払い、テーブルに乱暴に投げ置く。

「何でそんなに怒るんですか……？」

汐里がぽつりと呟く。それに対して秋也は溜息をついた。

「ものを勝手に動かすな。おれはそう言ってるんだ。この家の所有者は鈴音だぜ。客人のお前には何もする権利はねえだろ。無駄にものを動かされると落ちつかねえ」

幾分声を抑えながら話すと汐里は目を見開いていた。何を言っているのか理解できていないようだ。

秋也が更に言い募ろうとしたとき、汐里が口をゆっくりと開く。

「そんなに今の状況が変化するのが嫌なんですか？　掃除なんて誰でもするでしょう？」

部屋のことを言われている。それはわかっているのだ。しかし、

頭では違うことを考えてしまっていた。
汐里に自分の中にいつも身を潜めて隠れている、ただ一つの恐怖を暴かれた錯覚を覚えた。
一瞬意識が飛んだように足が凍りつく。
数秒で覚醒した意識にあるのは目の前にいる自分とは違う純粋無垢な少女に対する、混じりけのない怒りだけだった。
理性が警告を発する。殴ってはいけないと。
それに対し、本能が叫ぶ。
汐里(こいつ)を自分の前から追い出さなければいけないと。
そうしなければ、あの時のような恐怖が、絶望がまた姿を表すかもしれない、と。

「ふ……ざけるな……っ！」

ひゅっ、と耳元で自分の拳が通り過ぎる音がした。本能には逆らってはいけない。信じられるのは己の直観だけ。
今は躊躇わずに、目の前の敵を削除するのみ。
汐里が小さい悲鳴を漏らして一歩後ずさる。

「秋也、やめろ」

無機質な声が暴走を止めた。声のした方に緩慢な動作で首を向けると真っ黒な瞳がじっと秋也を見透かしていた。
ぽたり、と乾いていない髪の毛から滴が垂れる。
次いで顎から一筋の冷や汗も同時に床に落ちた。
乱れた呼吸が煩い。

秋也は鈴音に何か言おうとするが口をつぐみ、振り上げていた手をさげる。

「2人とも座れ。話がある」

何もなかったように振舞われて逆に安心した。秋也は不様な醜態をさらしてしまったことに羞恥を覚える。
たぶん、鈴音は何も問いただしたりはしないだろう。
そういう奴だ。

2人が座ると鈴音は脇に抱えていた写真をテーブルの上に置く。
昨日の写真か……。

「電気屋で印刷してきたのはいいが、結局なにも手がかりはなしだ。こんな格好されたんじゃ男女区別もつかない。それに、正常な人間であるかも怪しい」
「どういう意味だ？」
「それはこれから見る昨日の映像でわかるさ。汐里、部屋の電気消せ」
「はい」

鈴音愛用のノートパソコンにメモリカードを入れると壁に映像が投影された。音声を出していないのであたりは沈黙に包まれる。
ある場面で鈴音は映像を停止する。

「ここ、よくみろ」

アップにした映像から読み取られたのはあの伸縮自在の指。
それに呆気にとられて秋也と汐里は眼を大きく見開いた。

「これ、合成獣（キメラ）ってやつじゃねえか？」

合成獣。
それは今、政府内部で秘密裏に開発されていると噂のものだ。
まだ成功が報道されてはいないが、外野の一部がその開発代に大いなる貢献をしていると聞く。

「……その可能性もあるが、理由がない。それに形が人間そのものだ。まだ開発段階でここまで精密なものを作ることができたのも考えがたい。合成獣ではないだろうな」

それまで黙っていた汐里がおもむろに口を開いた。

「これ、外野にも度々出現していました」

その言葉に鈴音の瞳があやしく光を帯びる。

「どういうことだ？」
「私、ここに来る前はご婦人のメイドを職業にしてたんです。その時、うっかり耳に入ってしまった話なんですが、ここ一か月の間に外野での犯罪行為が急に増加してきたんだそうです。それに頭を悩ませた政府が何らかの手を使い、犯罪数を激減させたと。それは真っ黒の姿をし、青い目を持ち、超人的な能力を携えた人間なのだと……」
「お前も見たのか？」
「いえ、私は一度も。ただ、奥様が助けてもらった経験があって、自慢げに私に話されていました」

鈴音は足を組み、なにやら深い思索に没頭しているようだった。
静寂。
風が窓を揺らす音だけが響く。しばらくして鈴音が組んでいた足をほどいた。
汐里がその動作に見入っていることが分かる。
確かに鈴音は他の人はあまり持っていないような、独特の雰囲気を持っている。
綺麗、艶やか、端整。どれも鈴音の前では色あせてしまうような。

「秋也。おれの肩に刺さっていた触手、まだ残ってるか」
「とりあえずどうしたらいいかわかんなかったからペットボトルに入れて冷蔵しといた。出すか？」
「ああ、頼む」

返事をして立ち上がる。
汐里も手伝おうと腰を浮かせたが、片手でそれを制し1人で取り

に行く。
その後ろで鈴音が汐里相手に不審な質問をしていた。
「お前、昔、姉がいなかったか？」
「姉……ですか」
汐里は記憶をたどるような仕草をする。
やがて申し訳なさそうに小さく首を振った。
「いないと思います。両親からもそんな話はされたことありませんし……」
「そうか、ならいいんだ」
鈴音が汐里から興味をなくしたように視線を外す。
再び、秋也の心にモヤモヤとした黒い疑念の感情が襲った。
何とか落ち着かせようと首を左右に振って冷静を装い、ペットボトルを取り出す。
「……っ、気味が悪いな。何だよ、これ……」
狭い中で謎の触手は静かに息づいていた。小さな気泡を浮かべて、生命を主張している。
思わず、手を離し鈍い音がしてペットボトルを落としてしまった時だった。

ぷしゅっ！
水の入ったペットボトルが内側から壊れた。否、壊された、と言う方が正しいかもしれない。
檻から出た触手は秋也の頬を掠め、後方の窓を破ってあっという間に出て行った。

「どうした？」

音を聞きつけて、鈴音がキッチンに姿を現す。
一瞬の出来事であまり脳が上手く作動しない。肝心な時に役にたたない脳みそを軽く疎ましく思う。

「いや、おれもよくわかんねえ。ただ、わかったのは……。あの触手が生きていたことだけだ。悪い、驚いたら床に落としてそしたら、ペットボトル突き破って逃げた……」

ところどころの語尾がたどたどしくて、なんとも分かりにくい状況説明になっている。
だが、それでも衝撃を与えるには十分な事実が伝えられていて、3人には中身のない沈黙が、おりた。

＊＊＊＊＊

鈴音は今、手作りの地下室に引き籠っていた。
あの後はただ鈴音が誰にも口外するな、と口止めしただけでもう二人は寝息をたてている。

「くそっ」

珍しく、苛立って思わず誰も居ない空間に悪態をついた。
キャスター付きのイスの上で膝を抱えてその中に顔を埋める。
ここは鈴音だけの空間だ。
畳5畳分ほどの地下室は鈴音が一人でいたいときによく居座る場所だった。
キャスター付きのイスとデスクしか置いてあるものはないが、誰も入らないように指示してあった。

――あれの正体はなんなのか。

さっきからそればかりが脳を支配している。
おそらく犯人であろう者が一名だけ胸の内をよぎったが、そのはずはないと否定したかった。

（あの人は、愛情表現の仕方こそ歪んでいるものの、確かにおれを愛していた。あの人はこんなことはしないはずだ……）

顔を苦悶に歪めて肩を震わせた。

自分はこんなにも弱い人間だっただろうか。

膝から頭を離し、鈴音は己の上半身を見下した。

……女の、身体。

それがひどく艶めかしいものに見えた。

筋力トレーニングをすることで腹筋こそ男のように割れてはいるものの、それ以外はれっきとした女の身体だった。

戦闘場面に陥った場合、男の体よりも小柄ではあるが女の身体ならではの強みもあり、それに感謝したこともあったが、やはり力では敵わない。

女だというだけでこれだけのハンデ。

様々な危険と隣合わせの生活を強いられると理解していながらも男として生きる道は捨てられなかった。

女として生活していれば今の生活よりは楽なものになっていたのかもしれない。

脱ぐことについてそれほど抵抗はなかったのだから、むさ苦しい変態に身体を差し出していれば、金貨は今の二倍は稼げる。

実際のところ、今の状態はさらに厳しくなってきている。

自分が女だという噂が流れているのだ。

その噂を聞きつけた女がわざわざ鈴音の胸に手を触れたこともある。

その度にあらゆる手段を使ってバレないようにしてきたが、そろそろ限界か。

急げ。

疲れ果てている心身に叱咤する。

急ぐんだ。

もうあまり時間はない。

早くあの人を見つけて、ありのままの体を。
鈴音は再び膝に頭を沈ませ、一度だけ身を震わせた。
そして、小さく呻くように呟く。
「凛々亜……」
誰も居ない、真っ暗な闇にその名は、弾けた。

【ＶＩ】（後書き）

やっと第一章、終了です。
思ったよりも長くかかってしまいました＾＾；
ここまでお付き合いして頂いてありがとうございます。

次からは謎に少しづつ近づいていく予定ですので
ぜひ読んでみてくださいね（＾ω＾）

第二章：パズル合わせ【Ⅰ】

鈴音はあの夜から3日ほど地下室に閉じ籠っていた。今日から仕事にも戻るという。
秋也にとっては「よくあること」ですむ話だったが、汐里は地下室に閉じこもりきりの鈴音を心配している。
そんな二人のかみ合わない時間は秋也を苛立たせるばかりだ。

「おれは今から出かける。お前はどうする？」
「さあな。気分次第で」
「そうか」

そんな会話をしながら鈴音は薄い上着を羽織り、腰につけた銀色のチェーンを鳴らして素っ気なく出て行ってしまった。
それを見送った後、秋也は暇を持て余して汐里に視線を移す。それに気づいた汐里は少し気まずそうに視線を返す。
溝が、埋まったわけではなかった。
秋也にとって汐里の存在は、ただの邪魔であってそれ以上でも以下にも変化はない。
だが、そんな心境とは裏腹に鈴音というクッションがない状態で3日過ごし、ある程度の会話なら感情を押し殺して話すこともできた。
鈴音がそれを狙って閉じこもったのかは分からないが。

「いよいよ、明日か」

「そうですね。秋也と鈴音はこれからも一緒に暮らすんでしょう？」

黙って頷いた。

明日、汐里はここを出ていかなくてはいけない。明日で約束の日を迎えるのだ。

しかし、秋也は鈴音がこのまま汐里を外へ出す気はないように思えて仕方がないのが本音である。

籠っていた3日間の間も鈴音は頑なに汐里を外に出すことを拒んだ。軽い監禁のようだが、本人は自覚がないだろう。

そんなことを何をするともなく考えながら、半開きの窓から吹き込んでくる風に髪の毛をなびかせた。

＊＊＊＊＊

鈴音の普段の職場はＳＩＤでも有数の酒場だった。本業は何でも屋だが、毎日依頼があるわけではないので依頼がない日は副業としてここのバーテンダー兼パフォーマーをしている。

ここでは顔の良い男を目当てにした外野夫人や大酒飲みのＳＩＤの住民が集まるのだ。

鈴音はそこでは「レン」と名乗り、結構な顧客をつかむこともできた。

「おい、レン。ご無沙汰してたじゃねえか。本業の方が忙しいみてえだな」

「そこそこな」

「ちっ。ここ以外に働くところがあるやつは羨ましいね」

親しげに憎まれ口を叩いたのは、仕事仲間のコータ。酒場では鈴音の次に顧客が多い店員でもある。

金髪に緑色の瞳。金髪は生まれつきだろうが、緑の瞳はカラーコンタクトを付けているようだ。

普段はおちゃらけているところが目立つが、裏の噂では政府に目を付けられる程の“悪ふざけ”をしているという。

「あ、そうそう。お前のこと待ってたご夫人、いっぱいいたぜー？もう煩い、煩い」

「ああ……」

客が待っているようだ。若干、どうしても気だるい気分になる。“約一名”を除けば、大抵の女はキスをせがんできて鬱陶しい。

キスだけで金をもぎ取ることもできるから、それはそれでいいのだが。

店に出るとカウンター席が疎らに埋まっていた。顔見知りの常連客もいる。

その中の綾子（あやこ）に鈴音はすぐに声をかけた。綾子は付き合いが一番長く、他の客にはない親密なやりとりもしている。

有名な電気会社の社長秘書をやっているようだ。ついでに愛人でもある。それを利用して鈴音はよく綾子にはノートパソコンなどを安く譲ってもらったりもしていた。

そして、先ほど話した“約一名”でもある。

「あら、随分と遅い出勤じゃない。頼まれてたもの、持ってきたのに」

綾子が差し出したのは、３つの携帯電話だった。秋也、汐里との綿密な連絡情報のための代物である。

本人自動探索機能と暗視機能がついた最新のものを鈴音が綾子に無理を言って手に入れてきてもらったのだ。

「感謝しなさいよ？社長におねだりして手にいれたんだから。メインはその黒い携帯よ。アプリを仕込んであるから、そこで他の二人の居場所を確認することができるわ。その後の使用料は私の会社のほうで引き落とすように手続きしておいたわよ」

「ありがとうございます。代金はおれが払うと言いましたのに」

「いいのよ。どうせあの社長は有り余るくらいの財産あるんだから。そのかわりに今日のカクテルは無料（タダ）飲みさせてね」

「もちろんです」

秀麗な笑みを浮かべて頷く。３つの携帯を大事に受け取って、入れ替わりに２枚の写真を取り出した。

それを綾子の前に置く。

「こいつらの情報を手に入れてきてほしいんですが……」

「嫌よ。人探しは私の得意分野じゃないの。そういうのなら情報屋に頼んでちょうだい」

写真を見ようともせずに鈴音につき返す。

「情報屋？」

「あら、レンは知らなかったのね。情報屋って言うのは表向きはただの新聞社よ。けれど裏の世界では情報屋と呼ばれて彼の驚異的な情報収集能力を信頼して多くの外野たち

が情報を売ってもらってる。彼の名前は大悟。地図をあげるから行ってみるといいわ。言っておくけど、彼の情報ほど確実なものはない。腕だけは保障するわよ」

「……大悟、ですか。じゃあ今からでも訪ねてみます」

「そう。それじゃ、地図をメールで送っておくわ」

綾子が店を出たあと、他の客から金だけをせしめて店をでた。綾子からメールできた地図を確認する。

地図がさすところを見るとあのやけに大きいビルのようだ。

情報屋。

稼業にしているくらいだから腕はなかなかいいだろう。これは、思わぬ収穫が入った。

プロならきっと内部のほうまで詳しく知っていそうだしな。

鈴音は地図を眺めて、わずかに口元を緩めた。

第二章：パズル合わせ【Ⅰ】（後書き）

第二章突入です。
新キャラも今回だけで2人も出てきました。

ああ、軽いスランプなもので、いつもよりも酷い文になってしまって申し訳ないっ…

感想など、ご気軽にくださいな（＾ω＾）
めちゃくちゃ喜びます！

【Ｉ】

店を出て１５分程南に歩くとまだ造りのしっかりしたコンクリートのビルに辿り着いた。綾子の地図が正しいとすれば大悟と呼ばれる情報屋はこのビルの３階にいる。３階を仰ぎ見るとカーテンを薄く張られた窓から僅かに人工的な明かりが漏れていた。

「ここに人が住んでいたとはな。せいぜい家なしの奴らの溜まり場だと思っていたが」

盲点だった。

このビルは政府の役人が視察で必ず点検している箇所である。情報屋など、非公式の……あきらかに政府のレッドカードに引っかかる職業の本拠地にするにはあまりにも不適格な場所だ。情報屋には多少なりとも“コネ”があるらしい。外野お達しの情報屋というならばそれも当然か。

重たいドアを押しあける。埃が舞って鈴音は端正な顔をわずかに歪めた。そのまま煩く閉まったドアを尻目に階段を上る。ビルの中は窓がなく、まだ夕暮れ前だというのに真っ暗だった。非常灯の緑色の光以外は光と呼ばれるものはない。不健康そうな場所だ。

そんなことを考えていると、さっきもらったばかりの携帯電話が静かに鳴いた。

「もしもし」

『ああ、良かった。レンがまだ携帯もっててくれて』

「どうしたんですか？」

『今、ビルの中かしら？重要なことを伝えるのを忘れてね』
「重要なこと？」
『ええ。情報屋に入るのにはパスが必要なの。それを見せないと』

綾子が話してる途中に大きな拳が飛んできた。首をひとつ動かしてそれを避ける。

「なるほど、ガタイのいい警備員が襲ってくるんですね？」
『そうなの。もう手遅れだったかしら？』
「問題ありません。また後でかけなおしてもいいですか？」
『わかった。それじゃあ』

携帯を閉じて後ろポケットにねじ込んだ。体格のいいサングラスをかけた男。この暗闇にサングラスは些か不釣り合いな組み合わせに思えた。二人とも向かい合わせになったまま、微動だにしない。暫く続いたにらみ合いを先に解いたのは男の方だった。鋭く放たれた拳が大気を切る。それをまたもやかわした鈴音が勢いをつけた右足を男の胴体に食らわせた。男はわずかにうめき声をあげて数歩退く。

「そこを退けおれはお前のご主人に依頼しにきた立派な客だ。政府の諜報員でもなんでもない」
「駄目だ」
「ふん。融通のきかない奴だ。強行突破はあんまり好きではないんだがな」

言い終わるのが早いか、鈴音が音もなく滑るように動いた。伸ばした右腕が目指す場所は首。男は慌てて後ずさるがもう遅い。首の付け根を捕らえた。そのままコンクリートの壁に打ち付ける。男は不格好な声を出して、鈴音の手から逃れようともがく。

「手ごたえがなさすぎるな。さて、これからどうしようか。このまま絞め殺されたいか？それとも、お前が敬愛しているご主人の前でメッタ刺しにしてやろうか？好きな方を選ばせてやる」

男がかけていたサングラスを空いている左手で外し、割った。ぺきんと音がしてそれはあっけなく鈴音の靴の底で粉々になる。

冷ややかな笑みを浮かべた鈴音に男は初めて恐怖を野ざらしになった瞳に浮かべていた。周りの暗闇に同化している鈴音の黒い双眸には何の表情もなく、ただ瞳への侵入を拒むように煌めかせ、バリアを張り巡らせている。それでいて歪んだ口元に男はただならぬ殺気と拒絶とを感じさせるものがあった。

男は必死で首を振り、命乞いをする。飛び散った冷や汗が鈴音の顔にかかり、不快そうに眉をひそめた。

「そこらへんでそいつを解放してやれ、若いの」

どこからか聞こえた声に鈴音は手を離さずに振り向く。闇の奥から出てきたのはおそらく情報屋の大悟だろう。太い腕には龍のタトゥーが彫られていて、情報屋というよりはどこかのヤクザに間違われてしまいそうな強面だ。片腕には読みかけだったのであろう、新

聞と携帯が握られている。

「お前が情報屋か。話をしたい」
「そのつもりで出てきた。さっき綾子さんから電話があったんでな。奥に来い。依頼人となりゃ話はちゃんと聞かねえとな」

奥には依頼人専用の客室があるという。鈴音は男の首を離し、大悟の後に付いていく。
やっとありつけた確かな情報を逃すわけにはいかない。金は十分に持ってきた。欲しいだけくれてやる。どうしても手に入れたかった情報が手に入るのならば、おれは何だってする。　大悟、こいつにはしっかり働いてもらわないとな。
鈴音は拳を小さく握りしめた。

【II】（後書き）

随分と更新が遅くなってしまいました（汗）
すみません、学年末テストだったんです

【ＩＩＩ】（前書き）

途中で少しだけ官能な表現があるかと思われます。
…ほんの少しです！

【III】

客間に通された鈴音は早く用件を片付けるべく単刀直入に話を切り出した。電気屋でコピーした青い瞳の写真ともうひとつは汐里の写真。それらを部屋の中央においてあった木材のテーブルに置く。それを見た大悟はため息をついて写真を差し戻す。その仕草に鈴音は眉をひそめた。

「どうして受け取らない。これが仕事の依頼だ」
「まあまあ、そう怒るなよ。そんなに早く用件を出してもらっちゃ困る。おれとしてもあんたに興味があるんだ。少しくらい話をしたって許されるさ。なあ？」
「話をする必要性がない。少なくともおれはな。最近まで付きまとわれていた奴に仕事を依頼するなんて不本意なんだ。さっさと取引を終わらせたい」
「おっ、流石に気づいてたか。付きまとっていて得られた情報でとても興味深いものがあったんでな。それについて少し話をしたいんだ。いいだろう？」

唇の両端をあげ、大悟は笑みらしきものを顔に浮かべた。しかし、それは変態のそれにしか見えず、この男の底意地の悪さを明確にしていた。

「興味深い情報か。話を聞こう。その情報は何だ」
「思い当たる節があるだろう？　例えば、酒場の売れっ子が実は女

だったとか、な」

くすっ

鈴音が小さく笑う。ばれていることを最初から予測していたかのように。または、その危機を楽しんでいるかのように。

どちらにしろ、大悟に言われたことに動揺を感じている素振りは見せなかった。

「それで？おれにここで脱げとでも言いたいのか？　お前くらいの財産を持ってるやつなら女には苦労していないと思うが」

「そう、おれは女には苦労なんざしたことねえさ。だが、男として暮らしている女の裸とお前が酒場のサービスでやっている“蕩けるようなキス”を味わって見たくてな。なにせおれの周りにはそういう女はいないんだ」

「全く、最近は男どもは妙に性欲が有り余っているようだな。おれはこういう趣味はないんだが」

それだけ言ってからおもむろにTシャツに手をかけた。わずかな衣ずれがして、鈴音の上半身が露になる。しかし、わずかなふくらみのある胸にはさらしがきつく巻かれており、鈴音はそれさえも脱いでみせた。Tシャツの下には滑らかで褐色の肌の色。小さいが形のよい乳房。腹筋はきれいに割れていた。

舌舐めずり。自分の胸を隠すこともせずに不敵な顔で大悟の顔を凝視する。唐突に二人の唇が重なり合った。いきなりのことに閉じられていた大悟の歯を無理やりにこじ開け、鈴音の舌が侵入する。官能的な空間。二人分の体重がかかり、ソファーのスプリングが悲鳴をあげた。

「っふ」

僅かに漏れた吐息は二人の唇の間を抜け、大気に交わる。大悟は小さく仰け反った。時折鈴音が故意的にならすリップ音は無機質な客間に多少の潤いを与えた。

壁にかけられた時計の秒針がちょうど二周したとき、その空間は断ち切られ、二人の間には客観的な空白が生じる。

「どう？感想は」

大悟の顎をつまみあげ、足を組んで上品に笑っている様はまだ余裕があることが窺えた。

「悪くねえな。さすが、女たちに騒がれるだけある。ホストなんてやらねえで娼婦になりゃもっとがっぽり稼げたと思うぜ」

「そりゃどうも。生憎、貧弱な胸しか持ち合わせてなくてね。娼婦は向いてないんだ。それより、ここまでサービスしたんだから料金安くしろよ」

「ああ、検討しておく」

ソファーから降りて、Tシャツを着込む背中を大悟は思わず凝視した。無数の傷跡。小さいものから大きいものまで、様々な傷跡が背中に刻まれていた。それと、もう一つ。首筋に捺された焼き印。

そこだけが滑らかな肌の上で存在を主張していた。丸い焼き印。形からして何か意味を持つ刻印かと思われた。普段はファンデーションで隠してるのであろう。しかし今はさっきの交わり合いでこすれ落ち、半分ほどが見えてしまっていた

二つの謎。久し振りに大悟が一人の人間の情報に興味を持った。女のくせに酒場のホストをやる度胸、真実がばれても不敵に笑う、鈴音。一体、どこからその余裕はくるのか。大悟は

「それで？金はいくら用意すればいい」

いきなり振り向かれたことにぎくりとした。多少、動揺しながらてもとにあった煙草に火をつける。

「そうだな。そのお二人さんだけなら金貨三枚が妥当ってところだな」

「いつまでに情報を集められる？」

「最低でも五日は必要だ」

「それじゃ、遅い。三日でなんとかしろ」

鈴音が睨みを利かせた目ですっぱりとそう言い放った。

「三日で終わったら報酬はあんたの望んだ額の二倍払う。悪い話じゃないだろう？」

「金貨六枚ね。魅力的な数字なのは確かだが、三日はいくらなんでも無理だぜ」

不服そうに鈴音が眉をひそめてテーブルの上の煙草をくわえた。火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出す。自分の要求が当てもなく彷徨う空間は居心地が悪く、その場を縫い合わせるための煙草だったがそれは逆に不快感を深めるばかりだった。

（この男、馬鹿ではないな）

素直にそう思う。金には釣られず、自分の力量にあった分だけの仕事を受ける。そういうやり方は嫌いではない。

「それじゃあ、片方だけでいい。こっちの女だけは三日で調べ上げてくれ。つい最近まで外野夫人のメイドをやっていた女だ。外野にはたくさん知り合いもいるだろうしな」

「まあ、片方だけなら何とかなるな。わかった。引き受けよう。こっちの得体が知れない奴はで調べる五日で調べる。それでいいな」

「もちろんだ。また三日後に来る。それまでに用紙にまとめておけ」

「言われなくとも」

大悟が肩をすくめて言う。前金の金貨三枚をテーブルに乗せ、部屋をあとにした。外はもう夕暮れ。沈もうとする太陽に鋭い視線を送りながら、鈴音は一人、呟く。

ただ、一言

『待っていろ』と。

【Ⅳ】（前書き）

お久しぶりです。
文章を直すのに時間がかかってしまい、次話投稿まで遅くなってしまいました。

そして、報告です。
作者名を「月彩」から「椎名　ルイ」に変更いたしました。
月彩という名前は読みにくいなぁと思い、カタカナに直しました。
今後ともよろしくお願いいたします。

【Ⅳ】

汐里は開かない扉と腕時計とを見比べてため息をついた。もう夜の八時になろうとしているのに2人の姿はない。秋也はただ一言、出かけてくると言ったきりかれこれ2時間も帰ってこない。鈴音は朝早くから仕事に行っているようだった。

我が儘だということは百も承知だが、こんな薄暗い部屋に独りきりは寂しく、早く2人に帰ってきて欲しい。

それに、今日はここに泊まれる最終日。そう、今日が約束の7日目なのだ。明日には荷物をまとめてここを出て行かなくてはならない。宿泊代で既に無一文の汐里は早く仕事も見つけなければならなかったのだ。

正直、もっとこの家で暮らしていたい。それはただ単に甘えからではなく、純粋な鈴音たちを慕う心からでていた。初めは無愛想で苦手だと思っていた秋也は実は優しくて頼りになる人なのだと知った。鈴音とはあまり話したことがないが、おそらく鈴音も優しい人なのだろう。そうでもなければ見ず知らずの汐里を助けてはくれない。

「少し、外に出てみたいなあ」

ここに来てからの唯一の不満はそれだけだった。薄暗い部屋で二人の帰りを待つのはもう慣れてしまったし、食事も結構贅沢なものを与えられていたと思う。しかし、外に出してもらえない。鈴音が外出を禁止する意味もわからない。外への憧れは日に日に募るばかり。仕事だって探さなければならなかったのに、外へ出られないばかりに結局無職のままなのだ。

約一週間、それでも不満を言わずに部屋の中でじっとしていられたのはこの家の本のおかげである。
今、手にとって読んでいるのは汐里も引っ越す前に読んでいた人気作家の新作だった。読み終わる前に古本屋に売ってしまったのでラストが気になっていたのだが、まさかこんなところでそれが叶うとは思わなかった。そんなポピュラー小説以外にも歴史書や雑誌、医学書までが揃っていて読書好きな汐里は退屈することが無かったのだ。以前、鈴音になぜこんなにたくさんの本があるのか尋ねてみたら、知人からのもらいものだと言って詮索されるのが迷惑そうな顔をされた覚えがある。
そんなことをぼんやりと思いだしていたら不意にドアを叩く音が聞こえた。鈴音か秋也が帰って来たのだと疑う様子もなく扉を思いっきり開く。

「よぉ。初めまして」

扉を開けて顔をだしたのは、全く知らない男の顔だった。髪の毛を金色に染め、いかにもチャラそうな外見。しかし、汐里に向ける瞳にはそのへらへらとした表情とは似ても似つかない殺気が漂っている。
汐里は本性に従ってゆっくりと一歩、後ずさった。それを逃がすまいと男に手首をつかまれる。強い力だ。ほどけそうにない。

「逃げるなよ。あんたに聞きたいことあってわざわざここまで来たんだ。話くらいは聞けよ」

有無を言わせない口ぶり。

「あなたは誰なんですか？　腕を離してください」

にこり。男が笑う。

「レンにチクられると困るから名前は言えねえな」
「ふざけないでください。　それに、レンって誰ですか？」

すっ、と細められた目。
その眼光に射抜かれる。

「レンってのは、鈴音のことだぜ。嬢ちゃん？　ウェイクって酒場に行ってみな。そこで奴は働いてる。それと」

つかまれた腕に力がこもる。男のごつごつした指が食い込んだ。痛みでわずかに顔をしかめる。

「あんまり調子に乗るなよ。こっちの質問にだけ答えりゃいいんだ。あんたの質問に答える暇はねえ」

反論をさらに返そうとするが、首元にナイフが当てられた。ひく

り、と喉が上下する。生唾がわいてきた。

「今自分が置かれている状況を、そろそろ分かってくれねえか？緊張感のねえ女だな。イライラする」

舌打ちをして、低く囁く。ぞわりと悪寒が走った。

「さて、やっと大人しくなったな。おれが聞きたいことってのは、ひとつだ。イエス・ノーで答えろ」

「いいご身分だな、コータ。おれに無断で客に尋問か？」

闇の奥で鈴音のアルトの声が聞こえた。すっ、と姿を現す。瞳が冷たく輝いていた。

「おお？　王子様のお出ましってわけか。今お楽しみ中なんでね。野郎は引っ込んでろ。それとも、この女を助けるか？」

コータと呼ばれた男が発した皮肉を鈴音は肩をすくめて受け流した。ピリピリとした空気。

「まあな。その女はおれの大事な客なんでね。御返し願おうか。できれば穏便に済ましたい。面倒なことはごめんだ」

「穏便にいくとは思ってはねえだろ？　レン。戦えよ。つまらねえ

奴だな」

言い終わると同時に首元から刃が離れ、コータが素早く鈴音との間合いを詰めた。

軽い調子でひらりとかわす。鈴音は腰から銃を取り出し、コータの額に狙いを定める。一発。弾丸ははずれ、地面に食い込む。

「おいおい、それはねえぜ。ちょっと卑怯なんじゃねえか？」

言葉を無視し、2発目。一瞬立ち止まったコータの肩を軽く掠める。しかし、コータは気にする様子もなく再び襲いかかる。銃のボディで刃を防ぐ。

「残念ながら、おれはお前の弱点を知ってるんだぜ？　右肩、痛いんだろ？」

「余計なお世話だ。弱点を知っててもそこまでたどり着けるのか？」

「たどり着くさ」

自信まんまんに答えるコータ。銃の弾が残り少なくなった鈴音もナイフに変える。接近戦になった。ましてや鈴音の負傷しているのは利き腕だ。まだ完治はしていない。相当な痛みを伴うはずだ。だが、鈴音は顔色ひとつ変えずに大きく肩を振りかぶる。その時、僅かに鈴音の判断力が鈍った。そこをコータが見逃すはずもなく、銀色の刃は右肩に向かった。

「鈴音っ」

思わず声をあげる。肩の薄皮と衣服を犠牲にして接近したコータの後ろに回る。そして、首筋に銃を突きつけた。がちりと鈍い音がして、あたりは再び沈黙を取り戻す。

「ちっ。今日はここまでか。相変わらずシケた戦闘方法しか使わねえな。戦いを楽しむ心は持ってねえのか？」
「あんたと何かを楽しむつもりはない。首をふっとばすぞ」
「あーあ。萎えちまった。じゃ、今日は帰るとすっか。明日も店来るんだろ？」
「生憎だが行くつもりはない。本業で手一杯だからな」
「あっそ」

それだけ言うと、コータは背伸びをしてだるそうに帰っていった。図太い神経の持ち主だ。後ろから銃を突きつけられながら、背伸びをするなんて。
ある意味感嘆してると鈴音はこちらを振り返り、早足で近寄って来たかと思うと平手が飛んできた。頬に熱がこもる。突然のことに呆然としたが、鈴音の目は限りなく冷ややかなそれだった。

「おれの手を煩わせるな。ドアを開けるときは確認しろと何度も言ってあったはずだ。なぜ守らない」
「……ごめんなさい」

素直に謝る。今回は汐里が悪い。鈴音は憮然とした背を向け部屋に入った。

そしてその後を汐里は気落ちした様子で追うのであった。

【V】（前書き）

今回文章短めです

【V】

「失敗した。すぐにこれを渡しておくべきだった」

そう言われて差し出されたのは、白色の携帯電話だった。小型な最新式のようだ。

「これは？」

「携帯電話だ。見ての通りな。それでこれからは連絡を取り合う。今日みたいな目はもうごめんだからな。それを常に持ち歩いてろ。そうすれば、あんたの位置が特定できる」

「特定って……。ペットや子供じゃないんですから……」

「ペットにしろ、子供にしろ、あんたにしろ、厄介だってことには変わりない」

「反論はできないですけどね」

苦笑する。だが、ある疑問が汐里の脳内に浮かび上がった。

今日で宿泊期間は終わったはず。なのに、何故携帯など渡すのだろうか。もしかしたら、これからもここに居ていいのか、という期待がよぎる。

「それと、これ」

鈴音が差し出した紙袋の中に入っていたのは、前勤めていた屋敷で来ていたのと似たようなメイド服だった。首をかしげる。中に入ってる1枚のメモ用紙をみると、中条綾子邸中級メイドとだけ書いてある。中条という名は聞いたことはあった。何しろ、前の屋敷でも電器メーカー社長の美人秘書と噂があったのだ。

「中条の名は知っているな？　明日からお前はそこで働くことになった。契約内容も申し分ない」
「ええ？　で、でも私住むところがないですよ？」
「ここに住んでもらっても構わない。またここにかけ込まれちゃ迷惑だからな」

無表情で淡々と話す鈴音に思い切り頭を下げた。迷惑そうな顔で見られたが、気にはしない。鈴音のおかげで住む場所も就職場所も決まったのだ。しかも最初から中級メイドだなんて信じられない。普通はメイド専門学校を卒業したら初級メイドから始めるのだ。中級メイドになるにはそれだけの素質が必要になる。前の屋敷でもドジばかりやってしまって初級メイドにしかなれなかった。

「そんなことより、秋也はどこに行った？」
「あ、分かりません。結構前に出て行ってそれから帰ってきてないので」
「……そうか」

苛立たしげに頷いた。何か用だったのだろうか？

「じゃあ、先にシャワー浴びてきます」

若干高揚した気分を隠せずに、シャワーに向かう。このとき、汐里はあることを実行しようと決めていた。

＊＊＊＊＊

秋也は木枯らしの吹く中に身を潜めていた。

眼下に広がるのは、無数の飢えた子供たち。何とか今日の分の食糧を手にしようともがき苦しんでいる。物乞いの子もいれば、盗みに走る子もいる。ごく稀には自分の肉まで喰らおうとする子供もいるが、それは最後まで生へしがみつこうとする者だけだろう。大半の者は最後は諦め、せめて楽に死ねる方法を探す。

秋也も、その中の1人だった。さして自分の命にさえ興味を持たず、このまま死ぬなら死ねばいいと思っていた。母親に食べ物を盗ってこいと言われ、失敗すると殴られるよりは死んだ方がマシに思えていたのだ。死への憧れ、欲求。それが子供の頃の秋也のすべてだった。それが、変化したのは……。

「ここに顔見せるなんて久々じゃないか」

背後から聞きなれた声が聞こえた。振り向くと伸びっぱなしの髪の毛にもじゃもじゃの髭面の老人がいた。

「……何だ、じじい。まだしぶとく生きてんのか？」
「お陰さまでな。最近仲良くなった外野の嬢ちゃんが食べもんを与えてくれるものでのう、助かってる」
「けっ。あんたも元気なもんだな」

軽口をたたく秋也の目には少しだけ穏やかさが見て取れた。
じじい、と呼ばれたこの老人は名を翁（おきな）と言う。だが、それは周りの人々が便宜上つけた名前であり、本名ではない。翁はまだ誰にも自分の名を明かしてはいなかった。
何者なのか分からない老人だったが、秋也はいつしか翁と仲良くなり、今では顔を合わせれば世間話をする仲でもある。
翁はずいぶん前から、このスラム街のようなＳＩＤの一画に住みつくようになった。

「お前さんも逞しくなったな。見違えたものじゃ。若者らしい力を感じる」
「心にもないこと言ってんじゃねえよ。お世辞はあんたには似合わないぜ」
「お世辞じゃない。褒め言葉くらい素直に受け取ればいいじゃろう？」
「余計なお世話だ」
「そうじゃ、お前さんに情報がある」

急に翁は周りをはばかるように声を潜めた。秋也もその声を追って耳を傾ける。

「裏の政府が何かよからぬことを考えているようじゃ。恐らくは、鈴音という少女について。この前の襲撃も政府の手が回ってると考えた方がいいじゃろうな。お前さんも気を付けてな。うっかり、命を落とさぬように」

「気に入らねえな。鈴音と政府、どんな関係だってんだ。検討がつかない」

「そこまではまだ調べられてはおらん。分かり次第伝えるようにするが……。目を付けられるような動きは慎むんじゃぞ」

「わかってらぁ」

秋也は一瞬だけ目を足元に移し、その場を離れた。早足で家へと向かおうとする。その背には焦りと不安が感じられる。

翁が黙秘した、もうひとつの重大な情報を取り残したことも知らずに……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8486f/

夜半の声

2010年11月29日07時39分発行